

詩篇 23 篇 前編

導入

詩篇 23 篇は、聖書の中でもっとも親しまれた個所のひとつです。ご存じのとおり、詩篇はヘブル語の詩歌です。俳句と似た部分もありますが、少し違います。

19 世紀末に正岡子規は発句を俳句と名付けました。これにより、一般大衆も句を詠みやすくなりました。

子規は、切れ字を用いて句中のふたつの内容の区切りとしました。ヘブル語の詩歌はこれとは違います。ひとつの内容をふたつの異なる方法で表現します。原語のヘブル語ですと、とても暗誦しやすい形です。

ダビデは、同じ内容を違った表現方法で表します。

この詩篇はダビデが得た天の牧者からの励ましです。珠玉の詩篇と言えます。かつてユダヤ人の家庭では、食前にこの詩篇を唱えました。この詩篇は、冠婚葬祭のときだけでなく、人生のどんな場面にも適します。

詩篇を学ぶには、その背景を踏まえる必要があります。ダビデの時代に、イスラエルの田舎で羊飼いがどのように働いていたのかを知らなければなりません。

また、羊についてもいろいろ知る必要があります。これからいくつかその習性或問題点について見ていきます。

この二週間で詩篇 23 篇を学ぶ中で、皆さんの信仰が新たにいきいきとされることを私は願います。また、聖書の神をまだ信じていない方には、主イエスを人生の羊飼いと信じる機会となればと思います。

皆さんに頭の知識を増すためだけに聖書を学んでいただきたくありません。心で感じていただきたいのです。この詩篇が生きたものとなるために、大牧者イエス・キリストとの私個人の経験もお話します。私の人生に働いてくださった神が、皆さんにも働いてくださるのです。このことが、皆さんにとって励みとなりますように。人によって状況は違っても、そこに働く聖書の原則は同じです。

では、1 節から始めましょう。

「【主】は私の羊飼いです。」

(羊飼いを親しく知る。)

神に仕えるよう召されるまで、ダビデは多くの時間を羊と過ごしました。羊について知るべきことはすべて知っていました。常に羊と過ごすことで、羊についての知識を身につけました。ダビデは、他の群れの羊に混ざっても、自分の羊を見分けることができました。

即座に見分けることができたのは、自らの手で羊にしるしをつけていたからです。ダビデと同じ方法で、現在も羊にしるしをつける地域が世界にはあります。その方法とは、羊の耳に切れ目を入れる方法です。これは、署名のようなものです。日本では、正式文書に印鑑を押します。自分の印鑑を注文して作ってもらうことはできますが、印鑑が盗まれて他人が自分になりすます可能性もあります。

本人署名は違います。漢字やひらがな、カタカナでも、他人の文字は簡単に真似ることはできません。署名には、その人独特の個性が現れるからです。DNA がそれぞれ違うように、署名の仕方一人一人違います。

漢字、ひらがな、カタカナ、どれも人それぞれ文字のくせがあります。

ダビデが羊の耳に切れ目を入れる方法にもくせがあり、誰もそれを真似ることはできませんでした。

ここでダビデは、主が彼の羊飼いだと語ります。神がダビデと同じ立場を取ってくださり、ダビデは自ら神に従いました。ここで立場が変わります。ダビデが羊で神が羊飼いです。ダビデはこのようにしてこの詩篇を記しました。

旧約聖書に登場する描写

ダビデの立場をわかりやすくしてくれる旧約聖書の描写があります。聖書をお持ちの方は、申命記 15 章をお開きください。12-18 節をお読みします。

申命記 15 : 12-18

15:12 もし、あなたの同胞、ヘブル人の男あるいは女が、あなたのところに売られてきて六年間あなたに仕えたなら、七年目にはあなたは彼を自由の身にしてやらなければならない。15:13 彼を自由の身にしてやるときは、何も持たせずに去らせてはならない。15:14 必ず、あなたの羊の群れと打ち場と酒ぶねのうちから取って、彼にあてがってやらなければならない。あなたの神、【主】があなたに祝福として与えられたものを、彼に与えなければならない。15:15 あなたは、エジプトの地で奴隷であったあなたを、あなたの神、【主】が贖い出されたことを覚えていなさい。それゆえ、私は、きょう、この戒めをあなたに命じる。15:16 その者が、あなたとあなたの家族を愛し、あなたのもとにいてしあわせなので、「あなたのところから出て行きたくありません」と言うなら、15:17 あなたは、きりを取って、彼の耳を戸に刺し通しなさい。彼はいつまでもあなたの奴隷となる。女奴隷にも同じようにしなければならない。15:18 彼を自由の身にしてやるときには、きびしくしてはならない。彼は六年間、雇い人の賃金の二倍分あなたに仕えたからである。あなたの神、【主】は、あなたのなすすべてのことにおいて、あなたを祝福してくださる。

ヘブル人の奴隷が主人に一生仕えることを承諾すると、耳に穴を開けられます。

その穴に小さな輪を通します。こうして奴隷はその家族の一員となります。奴隷は自由になるという選択を放棄し、一生主人に仕えることを選んだのです。その奴隷は、その家族に引き取られるのです。

適用

主イエスに羊飼いとなっていたくにも、痛みが伴います。耳たぶに穴を開ける必要はありませんが、心を変えていただかなくてはなりません。

自分が罪人であることを神の御前に認めなくてはならないのです。これは、いい人たちにとっては苦痛なことです。日本人はとてもいい人たちで、表面的には何の問題もありません。けれども、この世にいるすべての人は罪深い心を持って生まれました（ローマ 5:12）。神が私たちの心に語りかけてくださり、ご自身の聖なる御姿を現わされると、神のようにきよくはない自分の姿に私たちは気づかされます。

自らの罪を悔い改めて神に向かって謝るのは、辛いことです。一方、神との関係は無償の賜物として私たちに提供されます。神が苦しみを通して、犠牲を払ってくださったおかげです。神はそのひとり子を世に遣わし、十字架につけられました。それは、私たちの罪の罰を代わって受けるためです。

ヨハネ 3:16

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

皆さんにお尋ねします。主イエスはあなたの羊飼いですか。イエスが死んであなたの罪の代価を支払ってくださったという真理を受け入れ、イエスと直接つながっていますか。もし「はい」と答えるなら、この詩篇から祝福を受けるでしょう。もしそうでないなら、今日、イエスを信じてはいかがでしょうか。

では、1 節の後半に進んでいきましょう。

「私は、乏しいことはありません。」

(羊飼いの備えで満足する。)

原語のヘブル語では、この部分は物質的なこととは特に関連付けられていません。ダビデがここで言おうとしているのは、神によって人生を支配されることに満足であるということです。ダビデは、神にすべてを与えていただくのをよしとしているのです。

イエスが私たちの羊飼いであるなら、私たちは何も「乏しいこと」（備えが不足する）がありません。

これと同じ真理が、詩篇 34 篇 9-10 節に記されています。

34:9 【主】を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。 **34:10** 若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、**【主】**を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。

主が私たちの羊飼いなら、神は私たちに良いものを惜しまず与えてくださいます。

主が私たちの羊飼いであるなら、神は3つのことを約束してくださいます。この約束は私たちがしっかりと握っているべきものです。

1. たましいの救い

私たちのたましいの救いに必要なものはすべて、主イエス・キリストにあって与えられています。

使徒パウロは、多くのにせ教師と対峙しなければなりません。にせ教師たちは、救われるために必要な条件をいろいろと追加しようとしていました。パウロは、そのような教えを正そうとします。

コロサイ 2 : 9-10

2:9 キリストのうちこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。 **2:10** そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。

他に必要なものはありません。必要なのはイエスだけです。

休みに入る前、最後にした仕事は、教会の 93 歳の女性の葬儀の司式でした。この女性は息を引き取る前、こうおっしゃいました。「牧師先生、私のたましいは安らかです。」

私たちのたましいが永遠に安らぐ救いに必要なものを、イエスがすべて与えてくださいます。

2. 人生の状況

神は、人生のどんな状況にも対応してくださいます。

マタイ 6:25-34

6:25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。 **6:26** 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。 **6:27** あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。 **6:28** なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。 **6:29** しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。 **6:30** きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。 **6:31** そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。 **6:32** こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。 **6:33** だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのもの

はすべて与えられます。6:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

30年近く前になりますが、神に召されて、エジンバラのフェイス・ミッション・バイブル・カレッジという聖書学校で学びました。

聖書学校に入学する前、神は私と妻のウエンディにみこころをはっきりと示してくださいました。それは、学びが終わったら、宣教師として日本へ赴くことでした。エクセターの快適な家を売り、職場からあてがわれていた車を返し、信仰によって踏み出しました。4か月ほどで貯蓄は底をつき、手元に食べ物もお金もなく、神がどのように必要を満たして下さるかかわからない状態でした。

私たち夫婦は家庭で祈りの時間を持っていました。壁には、ピリピ 4:19 の「また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」というみことばが掲げられていました。

神が答えてくださらないと感じて失望し、その日は聖書学校に行く気になれませんでした。学校まで片道分のガソリンが車に入っているだけで、帰りの分のガソリンはありませんでした。学校までは 20km ほどの道のりです。妻のウエンディは壁のみことばを見て言いました。「神様は、あなたの必要を満たして下さったわ。学校に行くのに必要なガソリンがあるのだから。私は家で祈っているわね。あなたが帰るときに必要な分も、神様が与えてくださるように。」

妻に背中を押されるようにして、私は学校へと車で向かいました。休み時間に、ある学生が話しかけてきました。この学生もまた、お金はほとんど持っていなかったのですが、私にお金を渡すようにと神がその朝彼に示されたというのです。それは、ガソリンを満タンにするのにちょうど十分な金額でした。こうして私は喜びながら家に帰りました。

これは私にとって初めての信仰のバンジージャンプでした。以来、信仰によって飛び出さなければならぬ経験を幾度もしましたが、これが最初でもっとも辛かったこともあり、記憶に残っています。

神は、皆さんの置かれた状況にも対応して下さいます。私たちが欲しいものではなく、必要な時に必要なものを与えて下さいます。神が遅すぎることは決してなく、早すぎることも滅多にないということを、私は身を持って学びました。神は、私たちが信仰によって歩み、神を信頼することを望んでおられます。

神は、私たちの置かれた状況が良くても悪くても、それにちゃんと対応して下さいます。ですから、神があなたへのみこころとされないものを追い求めないようにしましょう。多くのクリスチャンがそのような過ちを犯し、その結果に苦しみます。

3. 羊飼いは、私たちの終着地を備えてくださる。

ダビデは羊の群れを率いて牧場へ行き、また家畜小屋へと連れ戻しました。神も同じように、終着地である天へと私たちを導いて下さいます。天国については来週もう少し詳しくお話ししましょう。

詩篇 78 篇の 52-55 節にも同じ発想のことが記されています。

78:52 しかし神は、ご自分の民を、羊の群れのように連れ出し、家畜の群れのように荒野の中を連れて行かれた。78:53 彼らを安らかに導かれたので、彼らは恐れなかった。彼らの敵は、海が包んでしまった。78:54 こうして神は、ご自分の聖なる国、右の御手で造られたこの山に、彼らを連れて行かれた。78:55 神はまた、彼らの前から国々を追い出し、その地を相続地として彼らに分け与え、イスラエルの諸族をおのおのの天幕に住ませた。

私たちが予期しない方向、予想していなかった場所へと私たちを連れていかれますが、神が私たちの羊飼いなら、必ずいつの日か天国に連れて行って下さいます。

次に 2 節です。

「主は私を緑の牧場に伏させ、」

(羊飼いの導きに従う。)

1 節で、ダビデは神が自分にとってどのような存在かを語りました。ここでは、神が何をしてくださるかを語ります。神は、ダビデの実生活に働かれます。詩篇の中では、ダビデが羊で神が羊飼いであることを覚えておいてください。

ダビデはここで、神が緑の牧場に彼を伏させてくださると語ります。私たちはなかなか横になって休息を取ろうとはしません。一方、神はかすかな御声で私たちに語られます。私たちは忙しすぎて、神の御声を聞きそびれてしまうことがあります。

詩篇が描く場面から、羊にとって伏せるのは簡単ではないことを考える必要があります。

羊が伏せるのを邪魔する 4 つの事柄があります。

1. ひとつめは「恐れ」です。羊は犬が吠えていたり、見知らぬ人が来て叫んだりすると落ち着けません。また、自分たちの平穏を脅かすような遠くにいる野生動物の存在を察知します。
2. ふたつめは、「争い」です。群れの中に、他の羊を従えようとするボス羊がいます。羊は、争いがあるとそれを察知して落ち着けなくなります。ボス羊を群れから離して、早めに売りに出さなければならない場合もあります。
3. 3 つめは、「苛立ち」です。ハエなどの虫によって羊は落ち着けず、動き回ります。
4. 4 つめは、「空腹」です。

羊が横たわっているということは、十分にえさをもらって、恐れも苛立ちもない状態で、群れの中に争いもないということです。

羊が横になるには、良い羊飼いが適切な環境を整えてあげなければなりません。

適用

これらのことが私たちと何の関係があるのでしょうか。

私たちも羊のようです。恐れることもあれば、争いをもたらすような出来事もあります。苛立つこともありますし、霊の食物が足りていない場合もあります。

今の皆さんは、この 4 つのいずれかにあてはまりますか。もしそうなら、イエスはそれらのことを取り除いて、イエスとの完全な平安を持てるようにしてあげたいと望んでくださっています。

それらのものが取り除かれるまで、イエスのご臨在とイエスの平安を享受することはできません。

詩篇 34 : 10

若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、【主】を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。

2 節の後半に進みましょう。

「いこいの水のほとりに伴われます。」

(羊飼いの導きを体験する。)

羊は 7 割が水でできています。羊は乾燥地帯で生き延びることができますが、それでも水は必要です。羊の健康維持に水は欠かせません。羊は流れの速い場所で水を飲むことはできません。

「いこいの水」が必要なのです。流れの速い場所で水を飲もうとすると、肺に水が入って死んでしまいます。しかし同時に、きれいな飲み水が必要です。よどんだ汚い水を飲むと、病気になりやすいからです。

羊飼いは、羊が必要とする飲み水を得られるように、群れを適切な場所に連れて行く責任があります。どんな水でもよいわけではありません。

しかし、羊は水を飲まずに数カ月生き延びることができます。どうするのでしょうか。

朝早く起きて、植物にたまった朝露を飲むのです。緩やかな流れの場所で水を飲めるまで、こうして朝露から必要な水分を得ます。

イスラエルのヘルモン山のふもとには、世界でもっとも朝露の降る場所があります。このあたりでキャンプをすると、朝にはずぶ濡れになるほどです。

イエスはご自身の群れを神のみことばである聖書といういこいの水のほとりに導かれます。私たちが朝一番に神のご臨在という朝露に元気づけられることを望まれます。イギリスでは、このような時間をイエスと過ごす静思の時と呼びます。静思の時に、私たちは神のみことばという水を飲み、神のご臨在によって新しい力を得ます。「信仰の温泉」に毎日浸かるようなものです。忙しい一日が始まる前の朝一番が、イエスと時を過ごすのに最適な時間だといえるでしょう。

悪魔は、イエスとの思の時を私たちが過ごさないように邪魔しようと必死になります。私たちはその戦いに打ち勝って、生活の中でこのひとときを優先させなければなりません。

3節に進みます。

「主は私のたましいを生き返らせ、」

ここに「生き返らせ」と訳されたヘブル語の単語には3つの意味があります。壊れたものを修理する、空になったものを再び満たす、そして壊されたものや失ったものを取り替える、の3つです。

ここでダビデは自分のたましいの再生について語ります。

ダビデは詩篇 42 篇 11 節で次のように語ります。「わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか。なぜ、私の前で思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の顔の救い、私の神を。」

ダビデはここで、「仰向けの羊」のことを思い描いています。「仰向けの羊」とは、倒れたり転がったりしてひっくり返ってしまった羊です。羊は仰向けになると、自分で立つことはできません。そのまま放置しておくで死んでしまいます。羊飼いは、仰向けになった羊を見つけると、すぐに転がして元通りにしてやります。

適用

たくさんのクリスチャンが、人生で辛い状況に追い込まれます。自業自得の場合もあれば、神がそのような状況に置かれた場合もあります。神がそのような状況に人を置かれるのは、神ご自身の目的のためです。ヨセフも穴に投げ入れられたり、牢に入れられたりしたくはなかったでしょう。けれども神は、ヨセフがいずれエジプトの要人となるご計画をお持ちでした。

クリスチャンも、「仰向けになった」羊のようです。自分ではどうしようもないという状態になります。羊飼いが羊を転がしてくれるように、私たちのことも元に戻してくれる誰かが必要になります。最終的な答えは、羊飼いであるイエスに助けを求めることです。そうすれば、主は助けてくださいます。私たちを立ち直らせて、辛い状況の中で助けてくださいます。けれども、問題を抱えた他の人たちを立ち直らせるように、クリスチャンである私たちを神が召される場合もあります。

実際に何か行動するように導かれることもあります。例えば、誰かにお金を渡すとか、家族に先立たれた人を支えることかもしれません。過去に自分が何らかの問題で神に助けをいただいた経験があり、今度は同じような問題を抱えた人を助けることができるかもしれません。

私自身の経験から

数年前、私はロンドンで開かれた牧師向けのカンファレンスに参加しました。私は前日から現地に行きました。ある牧師から、「明日は何をしますか」と尋ねられたので、祈りの日にするつもりだと答えました。「何について祈るのですか」と問われ、「わかりません。その時になれば、神が教えてくださるでしょう」と答えました。

翌朝の8時半、朝食を終えて、祈ろうとひざまずきました。すると突然、前日の牧師のお父さんが部屋に入ってこられました。彼はクリスチャンではありませんでした。彼はこう言いました。「ずっと祈っててくださいよ。孫が入院したのですが、危篤なのです。」このとき、祈るべきことがはっきりわかりました。私はそれから5時間ほどずっとひざまずいて牧師の息子さんのために祈り続けました。そして、神が命を助けてくださるという確信を得ました。神を称えます。ロンドンで一番といわれる病院をとおして、神はこの奇跡を起こしてくださいました。神が、困っているクリスチャンを助けるように導かれるなら、どうぞ従ってください。どんなふうに用いてくださるか、私たちにはわからないのですから。

では、今日のメッセージの最後に3節の後半を見ていきます。

「御名のために、私を義の道に導かれます。」

羊は習慣の生き物です。牧草を食べている状態で放っておかれると、同じ場所を食べ続け、その部分の牧草がふたたび生えてなくなるまでに食べ尽くします。放っておかれると、牧草地をだめにしてしまうだけでなく、羊自身の健康も損なわれることになります。牧草地が荒れると、あらゆる病気をもたらす寄生虫がたちまち増えます。

では、どうすればよいのでしょうか。羊の群れは、常に新しい場所へと移動させなければなりません。一週間ごとに動かすのがよいとされています。

私たちも自分の好き勝手にしていると、イザヤ書に出てくる羊のようになります。

イザヤ書 53:6「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。・・・」

ですから、「義の道」へと導かれるには、神の道に従う必要があります。

これは、クリスチャンが後退してしまうか、神とともに前進できるかの分かれ道です。私たちには、クリスチャンとしての成長を経験する可能性が与えられています。信仰によって前進し、神の導きを信頼するなら、私たちの信仰は強められます。たましいも力を得、イエスとの歩みが深まります。

私たちが神とともに歩むように導かれるのは、私たち自身のためだけではありません。私たちがイエスに従う信仰の一步を踏み出すことによって、周囲の人たちが励まされるためでもあります。

羊の群れを新しい牧草地に移動させると、羊は大喜びすると羊飼いは言います。羊は喜んで飛び上がるそうです。

人間はそうでもありません。自分の思い通りにしたいと地団太踏むこともあります。

箴言 14:12にはこうあります。「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。」

一方、良い羊飼いは私たちのもとに来て、こうおっしゃいます。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」ヨハネ 10:10

今日、皆さんにお勧めします。御名のために、大いなる羊飼いであるイエス・キリストに人生を導いていただきましょう。大きな代償が伴いますが、永遠の報いを得られます。イエスに従う皆さんに、神の祝福がございますように。